

視線から見る対人意識

— 対人恐怖心性とシャイネスの観点から —

梅 田 拓 也

本研究は、視線意識を他者もしくは自己の視線に注意や関心、意識が向けられた状態をさすものと定義し、視線意識を測定する尺度の開発をした。そして、対人恐怖心性とシャイネスとの相関関係を検討し、妥当性の確認を行うことを目的として大学生を対象に行った。

結果より、「視線の回避」「視線による影響」「視線への困惑」「視線の維持」「視線への緊張」の5つの側面からなる視線意識尺度が構成された。また、対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1996）や早稲田シャイネス尺度（鈴木・山口・根建，1997）の相関関係から妥当性を得られたと考えられる。「視線の緊張」においてのみ、各学年を群として見た際に学年差が見られた。大学生は公的自己意識や私的自己意識がある程度育っているものの、大学生活の中での変化が見られたといえる。さらに視線意識の発達を見るには、幅広い年齢層に向けて行う必要があるといえる。視線意識の発達差や発達経路が明らかになった際には、視線に悩む人に対しての適切な援助を行うためのリソースになるだろう。そのために、縦断的にとらえた調査を行う必要があると考えられる。